2021年雑感

藤本佳弓

母方の祖父（故人）の出身地長崎市諏訪町へは初訪問が叶いました。祖父は台湾高雄に疎開していたため直接の原爆被害はなかったものの、生家を偲ぶよすがは何もないようです。

突然の紙芝居の漫画形式にて失礼します。藤本です。この度は二十周年記念誌の研究を試みていたことにおめでとうございます。今年はテレビでも原爆に関する朗報を聞く機会が過去の多く、心が明るくなりました。

最後に藤勝彌氏による小説『長崎飛翔』（二〇一一）を読んでみました。

昨年『原爆を見た少年』としての改訂版が出されました。本作は、父母を亡くした難病の少年が、変わり者の医師ベテラン・イタリア人宣教師に導かれて福山・長崎へ原爆投下の時代や原子野にタイムリープするという物語です。

医療、心理、宗教、歴史に関わる重層的な問題意識をブレンドした本作には、池澤夏樹氏による『アトミック・ボックス』（二〇一四）のようなエンタメ性はありませんが、「過去に学び今を生きる」という作者の姿勢からは非体験者主導の平和教育への意欲が感じられました。

最後になりましたが、原爆文学研究会のますますのご発展をお祈り申し上げます。